

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2017) 第17巻:27-36.

外来機能実習における学びの内容— 実習レポートからの分析—

荒 ひとみ, 苫米地 真弓, 阿部 修子

投稿論文

外来機能実習における学びの内容 — 実習レポートからの分析 —

荒 ひとみ、苫米地 真 弓、阿 部 修 子

【要 旨】

本研究の目的は、外来機能実習の学びの内容を実習後に提出されたレポートから明らかにすることである。

研究参加の同意を得た看護大学生の 51 名を対象に学びの内容を Berelson, B. による分析を行った。51 名の記述から 256 記録単位を分析した結果、【地域や多職種による医療チームとの情報共有および連携と継続看護の必要性】25.4%、【対象者の生活と生活背景を含む総合的な情報収集とアセスメントの必要性】16.8%、【医療チームにおける外来看護や外来看護師の能力と役割】12.9%、【対象者の生活の質を向上させ、セルフマネジメント能力を高める支援の必要性】11.7%、【限られた受診時間内での素早い対象把握と迅速な看護援助の必要性】10.9%、【外来で実施される治療や検査に伴う苦痛や安全安楽に配慮した援助の必要性】5.5%、【受診までの経緯と治療を継続しながらの生活を送る対象者】【家族関係の把握と家族を含めた看護援助の必要性】【対象者の意思を尊重する姿勢や精神的支援の必要性】4.3%、【外来看護支援を行うための幅広い知識の必要性】3.9%と 10 個のカテゴリが形成された。

抽出されたカテゴリより、外来機能実習における学生の学びは本学の外来機能実習目標の達成に繋がっている。

【キーワード】

外来機能実習、実習目的と目標、看護大学生、実習レポート、学びの内容

I. 緒言

本学における外来機能実習は、3 年次後期からの成人看護学のカリキュラムに組み込まれている。実習場所は、内科系外来（主に循環器科、呼吸器科）、認定看護師による看護専門外来（皮膚・排泄ケア、糖尿病療養相談、緩和ケア）、点滴センター、光学診療部における内視鏡室、入退院センター及び地域連携室を 1 週間



写真 1 糖尿病療養相談



写真 2 点滴センター

でローテーションする。外来機能実習は外来の特殊性上、多くの対象者と接し、時間も空間も限られている。そのため、1つの実習場所には2～6名の学生が配置され、実習時間は半日間とし、主な実習形態は見学実習である。

この実習の目的は『1. 外来を受診する成人期にある対象者の健康障害を理解し、継続看護を实践させるために必要な能力を養う』『2. 保健医療チームにおける看護の役割を理解し、継続看護を实践させるために必要な能力を養う』である。

実習レポートは、実習終了後に自由に記載する形式でA4サイズ2枚程度を提出している。

中田ら (2013)¹⁾ は、在宅看護論実習における退院支援・調整部門実習半日間の中で継続看護や多職種との連携を学ぶことができるとしている。また、堀越ら (2009)²⁾ は、手術室見学実習で多くの学生が実習の到達目標に対応した学びを得ていると報告している。また、飯岡ら (2014)³⁾ の成人看護学実習 (慢性期) に病棟と1週間の外来を組み合わせた実習についての報告では、外来看護の役割に関する理解が深まったとある。このように、各看護系大学では、病棟以外での臨床実習を行っているが、本学の外来機能実習のように成人看護学実習領域の中において、外来診療および外来検査部門、継続看護に関わる部門での実習の報告はほとんど見当たらない。

医療・看護ニーズの多様化と高度化されている状況の中で、外来実習で学生が何を学んでいるのかを把握することは重要である。今回、外来機能実習での学びの内容を明らかにして、実習目的・実習目標の評価、さらには今後の外来機能実習の教育方法を検討する基礎資料とすることに意義があると言える。

II. 研究目的

3年次に履修した外来機能実習の学びの内容を実習後に提出されたレポートから明らかにすることにより、実習目的・目標に沿った学びができていないかを検討することである。

III. 研究方法

1. 対象

看護学科第3学年で外来機能実習を履修し、成績認定が終了した第4学年58名

2. データの収集場所と期間

データ収集場所はA医科大学看護学科、データ収集期間は2014年5月～2016年1月

3. データ収集方法

1) 研究に参加同意した学生が第3学年時に外来機能実習で提出したレポート

4. 分析方法

外来機能実習全体を通して学んだことや考察の視点に関する記述を舟島のBerelson, B.の方法を参考にした看護教育における内容分析⁴⁾に基づきデータを質的記述的に分析した。

第1段階：研究のための問いは「学生は外来機能実習でなにを学んだとしているのか」

問いに対する回答文は「学生は外来機能実習で()を学んでいた」

問いに対する記述を素データとした。

表1 外来機能実習の概要

目的	1. 外来を受診する成人期にある対象者の健康障害を理解し、対象者に必要な看護支援ができるための能力を養う。 2. 保健医療チームにおける看護の役割を理解し、継続看護を実施するために必要な能力を養う。
目標	1) 健康障害で外来を受診する成人期の対象者を身体的、心理・社会的特徴にそって、総合的にアセスメントできる。 2) 専門外来などで行われている看護を通して、対象者のセルフマネジメントの能力を高めるための看護支援について説明できる。 3) 地域連携および入退院に関するシステムや機能を知り、対象者に必要な継続看護について説明することができる。 4) 外来で行われる治療・検査に必要な看護援助が理解できる。 5) 外来機能実習を通して、チーム医療の意義や看護職の役割について理解し、説明ができる。
方法	①外来を受診する対象者への問診の見学・インタビューと検査等の同行サマリーの作成。 ②がん化学療法および内視鏡検査を受ける対象者の看護援助 および見学。 ③専門外来における看護支援 (皮膚・排泄ケア、糖尿病療養相談、緩和ケア) の見学。 ④入退院センター・地域連携室での臨床講義および看護支援の見学
実習期間	1週間、1単位
評価	実習内容、実習記録、最終レポート、カンファレンスの参加、出席により総合的に評価

第2段階：記述された外来機能実習レポートから学生の学びについての内容を1文脈単位として抽出した。

次に、意味内容を損ねないように、主語と述語からなる文章を抽出して、記録単位とした。文章に複数の内容が記述されている時は分割し、複数の記録単位とした。

第3段階：記録単位を概観し、出現頻度の高い用語をキーワードとして、同一表現の記録単位、表現は多少異なるが意味内容が同一の記録単位、検討を要する記録単位にそれぞれ分類、整理した。

第4段階：第3段階で分類、整理された同一記録単位群を研究のための問いに対しての意味内容の類似性に基づいてカテゴリを形成した。

同一記録単位とカテゴリに分類された記録単位の出現頻度と比率を算出した。

分析の妥当性、信頼性を高めるために本研究に携わっていない看護研究者に依頼し、スコットの式に基づき、一致率を算出した。

5. 倫理的配慮

研究対象者は外来機能実習を終了し、単位認定後の第4学年時に研究参加の同意を得た。

- 1) 研究説明同意書を配布し、口頭にて研究の趣旨、目的、協力内容、個人のプライバシーの保護、個人が特定されないこと、本研究から生じる利益・不利益、成績とは無関係であること、データの管理、研究結果は学会発表および学会誌等への投稿をする可能性があることについて十分に説明を行った。
- 2) 自署による同意文書の提出をもって、同意を得た。
- 3) 研究説明者は本研究には関わっていない学年担任に依頼した。

本研究は、研究者が所属する大学の倫理委員会（課題番号 1731-3）の承諾を得て行なった。

IV. 結果

研究参加に同意した第4学年51名のレポートに記載されている外来機能実習全体を通して学んだ内容や考察の視点に関する記述を抽出して分析した。

レポートから得られた記述は167文脈単位で、問いに対する回答1つが含まれた記録単位は266記録単位であった。このうち抽象度が高く意味不明な10記録単位を除く、256記録単位を分析した。そして、これらの記録単位から63の同一記録単位群を抽出し、さらにこの同一記録単位群から10個のカテゴリを抽出した。以下、記録単位は「」、同一記録単位は< >、カテゴリは【】で示す。

抽出された10個のカテゴリは、多い順に【地域や多職種による医療チームとの情報共有および連携と継続看護の必要性】【対象者の生活と生活背景を含む総合的な情報収集とアセスメントの必要性】【医療チームにおける外来看護や外来看護師の能力と役割】【対象者の生活の質を向上させ、セルフマネジメント能力を高める支援の必要性】【限られた受診時間内での素早い対象把握と迅速な看護援助の必要性】【外来で実施される治療や検査に伴う苦痛や安全安楽に配慮した援助の必要性】【受診までの経緯と治療を継続しながら生活を送る対象者】【家族関係の把握と家族を含めた看護援助の必要性】【対象者の意思を尊重する姿勢や精神的支援の必要性】【外来看護支援を行うための幅広い知識の必要性】であった（表2）。

カテゴリと同一記録単位における一致率は71%、80%であった。

以下、カテゴリの学びの内容について記述する。

【地域や多職種による医療チームとの情報共有および連携と継続看護の必要性】

このカテゴリは、外来における継続看護の必要性和病院内だけではなく地域の医療者との連携の必要性の内容として分類された。このカテゴリに分類された記録単位は65で、全記録単位数の25.4%であり、全カテゴリの中で最も多い記録単位を含んでいた。

同一記録単位群は、<継続看護><継続的な関わりやケアの必要性><継続医療><多職種との連携><他部門との連携><外来部門との連携><他科との連携><病棟との連携><連携の必要><地域との連携><各機関との連携><各機関との連携><チーム医療><情報交換が重要><情報共有が重要><医療者間のコミュニケーションを上手にはかる必要性>が含まれていた。

表2 外来機能実習における学生の学び

カテゴリ	同一記録単位群	記録単位例	記録単位		
			個	%	
地域や多職種による医療チームとの情報共有および連携と継続看護の必要性：65 (25.4%)	継続看護	看護師は継続看護を考えていくことが重要であること。 入院前・退院後も看護はつながっていること。	11	4.3	
	継続的な関わりやケアの必要性	外来患者へは、継続したケアを行うことが必要であること。 看護師は自宅に帰ることを踏まえた看護を提供する必要があること。	9	3.5	
	継続医療	継続医療においては看護師は必要不可欠であること。 継続した医療を行っていくことが重要であること。	2	0.8	
	多職種との連携	看護師だけでなく、多職種で連携していくことでより良い援助ができること。 外来では医療者間での連携が必要であること。	9	3.5	
	他部門との連携	各部門は個別に機能しているのではなく、連携していること。 他の部門と連携すること。	2	0.8	
	外来部門との連携	外来部門同士の連携が患者の生活の援助には必要不可欠であること。 患者の問題を共有して外来と連携すること。	2	0.8	
	他科との連携	他科との連携が重要であること。	1	0.4	
	病棟との連携	病棟との連携が重要であること。 患者の問題を共有して病棟と連携すること。	2	0.8	
	連携の必要	連携により患者がスムーズ、安楽に医療・看護を受けることができること。 連携することが必要なこと。	2	0.8	
	地域との連携	地域との連携が重要であること。 患者の問題を共有して地域と連携すること。	3	1.2	
	各機関との連携	各機関との連携が必要なこと。	1	0.4	
	チーム医療	チーム医療においては、看護師は必要不可欠であること。 医療者間での連携のためのチーム医療の重要性。	10	3.9	
	情報交換が重要	他職種との情報交換が重要であること。 地域との情報交換が重要であること。	4	1.6	
	情報共有が重要	記録などによる情報の共有を行うことが大切であること。 地域との情報の共有が重要であること。	5	2.0	
	対象者の生活と生活背景を含む総合的な情報収集とアセスメントの必要性：43 (16.8%)	医療者間のコミュニケーションを上手にはかる必要性	地域で働く医療者とのコミュニケーションを上手にはかる必要があること。 病院で働く医療者とのコミュニケーションを上手にはかる必要があること。	2	0.8
生活把握の必要性		病棟の看護師以上に外来の看護師は、患者の家での生活を考える必要があること。 患者の生活を知ることが必要であること。	11	4.3	
生活背景を見ることや把握することの必要性		外来患者を考えるうえで、生活背景を踏まえることが重要であること。 患者の生活背景を把握し、それぞれに合った対応を行っていくことが必要であること。	12	4.7	
生活の重視や尊重		外来では生活に重点を置いていること。 看護師は対象者の生活基盤を尊重していること。	2	0.8	
健康状態の把握		自宅での健康状態を把握する必要があること。	1	0.4	
情報収集の必要性		患者の日常生活に焦点を当てながら情報収集すること。 外来は患者と接する時間が限られているため、事前の情報収集が必要であること。	5	2.0	
ニーズ把握の必要性		通院患者ならではのニーズを捉えることも重要であること。 ニーズを把握すること。	2	0.8	
アセスメントの必要性		患者の日常生活に焦点を当てながらアセスメントすること。 患者を総合的にアセスメントする力。	9	3.5	
その人全体を見ることの重要性		疾患だけを見るのではなく、その人全体を見ていくことが重要であること。	1	0.4	
予測的な対応や関わり方の必要性		外来看護の特徴には予測的な関わりが必要であること。 予測的なかわりをして患者自身で対応できるよう指導すること。	6	2.3	
連携する役割		地域と連携することが重要な役割であること。 様々な医療従事者と連携することが重要な役割であること。	4	1.6	
継続的に観察を行う役割		地域と継続的に観察を行うことが重要な役割であること。 様々な医療従事者と継続的に観察を行うことが重要な役割であること。	2	0.8	
医療チームにおける外来看護や外来看護師の能力と役割：33 (12.9%)		一貫した看護を提供する役割	一貫した看護を提供していくことが重要な役割であること。	1	0.4
		外来看護師の役割	外来看護師は患者が適切な医療を受けるよう援助する役割があること。 外来看護師はQOLの維持・向上につながるよう援助する役割があること。	4	1.6
		外来の役割	地域で生活していけるようにケアを提供することが外来の役割であること。 外来には継続した看護ができるための役割機能があること。	3	1.2
	つなぐ役割	患者を外来から病棟へとつなぐ役割。 退院後の情報共有を地域と行うためのつなぎ目としての役割。	4	1.6	
	判断力の必要性	どんな支援が必要かの判断が必要なこと。 患者が自己管理できるか否かの判断をすることが必要であること。	6	2.3	
	広い視野の必要性	病気だけにとらわれずに患者全体を見ることのできる広い視野を持つこと。 外来看護師には広い視野で細かな観察を行うことが求められること。	3	1.2	

表2 外来機能実習における学生の学び (つづき)

カテゴリ	同一記録単位群	記録単位例	記録単位	
			個	%
対象者の生活の質を向上させ、セルフマネジメント能力を高める支援の必要性: 30 (11.7%)	生活に治療を取り入れる支援の必要性	自宅での生活の中に治療を組み入れることを意識して支援する必要があること。 患者が生活の中に治療を取り入れられるような支援が必要であること。	2	0.8
	生活への支援	生活して困ったことはないかを聞き支援していくことが大切であること。 外来では患者さんの生活そのものを支えていくこと。	3	1.2
	生活の質・QOLが向上するような支援	病院で働く医療者は対象者の生活の質が向上するように支えることが求められていること。 外来ではQOLの向上が図られていること。	3	1.2
	指導や説明の必要性	患者が変化に対処できるように指導や説明すること。 患者の理解度にあった説明をするなどの援助の必要性。	11	4.3
	自己管理・セルフケアへの支援	患者がセルフマネジメント能力を高められるように関わることが必要であること。 セルフケア方法を考える時には、その人にあったセルフケアの方法を考えることが必要であること。	11	4.3
限られた受診時間内での素早い対象把握と迅速な看護援助の必要性: 28 (10.9%)	迅速な観察の必要性	外来看護には迅速な観察が必要であること。 外来看護の特徴にはその場での観察力が必要なこと。	2	0.8
	短時間での症状把握の必要性	看護師は対象者の症状を短時間で把握することが必要であること。 看護師は病状を短時間で把握しなくてはならないこと。	2	0.8
	短時間でのニーズ把握が大切	短時間で患者さんのニーズを把握することが大切であること。	1	0.4
	短(限られた)時間での情報収集の必要性	看護師は限られた時間の中で必要な情報を得ることが重要であること。 短時間での情報収集が必要であること。	5	2.0
	短(限られた)時間でのアセスメントの必要性	外来看護師は、限られた情報で瞬時にアセスメント出来る能力が必要である。 外来は患者と接する時間が限られているため、経験に裏づけされた瞬時のアセスメント能力が必要であること。	9	3.5
	素早い判断の必要性	外来患者と関わる時間は短い、その中で必要な援助は何であるかを判断すること。 外来では素早い判断力が必要であること。	2	0.8
	迅速な対応の必要性	短時間で患者に援助することが必要であること。 外来看護師は、瞬時に看護援助を提供できる必要がある。	6	2.3
一人に関わる時間は短い	一人に関わる時間は短いこと。	1	0.4	
外来で実施される検査や治療に伴う患者の苦痛や安全安楽に配慮した援助の必要性: 14 (5.5%)	安全安楽の必要性	患者が必要なケアを安全安楽に受けられることが必要であること。 看護師は安全な検査へ繋げなくてはならないこと。	10	3.9
	苦痛に対する援助	患者には治療や検査に伴い不安や苦痛があることを知る必要があること。 患者には治療や検査の苦痛に配慮してかかわることが必要であること。	4	1.6
受診までの経緯と治療を継続しながら生活を送る対象者: 11 (4.3%)	治療を継続すること	患者が外来治療を継続しながら生活を行っていきることが必要であること。 患者が生活の中で治療を続けていくうえでどんな部分に困っているのかという視点を持つこと。	4	1.6
	生活しながら治療や通院	患者は日常生活を送りながら外来通院していること。 患者が生活しながら治療が受けられるようにすること。	4	1.6
	受診の経緯	患者の入院までの経緯について。 患者がどのような流れで病院に来て、診察を受けて帰っていくのか一連の流れについて。	3	1.2
家族関係の把握と家族を含めた看護援助の必要性: 11 (4.3%)	家族や家族関係を把握する必要性	家庭環境を把握する必要があること。 家族のサポートを確認することが必要であること。	5	2.0
	協力者の有無を確認することの必要性	協力者の有無を確認することが必要であること。	1	0.4
	家族に対する援助の必要性	家族を含めたサポートが重要であること。 家族に対するアプローチも手厚く行うことが必要であること。	5	2.0
対象者の意思を尊重する姿勢や精神的支援の必要性: 11 (4.3%)	患者や家族の意思尊重	看護師が患者の自己決定を尊重すること。 生活のスタイルを維持できるような家族の意思を尊重した看護を提供していくことが重要であること。	3	1.2
	患者の不安に対する援助の必要性	看護師が患者の不安や心配事を明確にすること 患者の負担や不安を最小限にするための配慮が必要であること。	3	1.2
	精神面で患者を支える	精神的な面で患者を支えること。	1	0.4
	患者を受けとめる姿勢の重要性	患者を受けとめる姿勢が重要であること。	1	0.4
	対象者の気持ちに寄り添う必要性	対象者の気持ちに寄り添う必要があること。	1	0.4
	患者を一番に考える必要性	患者のことを一番に考えることが必要であること。	1	0.4
	患者の行動を肯定する声かけの必要性	患者の行動を肯定する声かけが必要であること。	1	0.4
外来看護支援を行うための幅広い知識の必要性: 10 (3.9%)	知識獲得が大切	患者の安全安楽のために知識の獲得が大切であること。 自己の安全安楽のために知識の獲得が大切であること。	3	1.2
	幅広い知識が必要	幅広く深い知識を持つことが、良いケアに繋がること。 外来では看護師は疾病に対する幅広い知識が必要であること。	6	2.3
	その場での知識が必要	外来看護の特徴にはその場での知識が必要であること。	1	0.4
計			256	100

【対象者の生活と生活背景を含む総合的な情報収集とアセスメントの必要性】

このカテゴリは、外来患者をアセスメントする上で個々の患者の生活や生活背景などの日常生活を把握し、総合的に対象を捉える必要性の内容として分類された。このカテゴリに分類された記録単位は 43 で、全記録単位数の 16.8%であった。

同一記録単位群は、＜生活把握の必要性＞＜生活背景を見ることや把握することの必要性＞＜生活の重視や尊重＞＜健康状態の把握＞＜情報収集の必要性＞＜ニーズ把握の必要性＞＜アセスメントの必要性＞＜その人全体を見ることの必要性＞が含まれていた。

【医療チームにおける外来看護や外来看護師の能力と役割】

このカテゴリは、医療チームとしての外来看護や外来看護師が求められる能力や医療チームの中での外来看護師の役割についての内容として分類された。このカテゴリに分類された記録単位は 33 で、全記録単位数の 12.9%であった。

同一記録単位群は、＜予測的な対応や関わりの必要性＞＜連携する役割＞＜継続的に観察を行う役割＞＜一貫した看護を提供する役割＞＜外来看護師の役割＞＜外来の役割＞＜つなぐ役割＞＜判断力の必要性＞＜広い視野の必要性＞が含まれていた。

【対象者の生活の質を向上させ、セルフマネジメント能力を高める支援の必要性】

このカテゴリは、治療による対象者の生活の変化によって、生活の質を低下させないように、あるいは、生活の質を向上させるために必要なセルフマネジメントへの支援についての内容として分類された。このカテゴリに分類された記録単位は 30 で、全記録単位数の 11.7%であった。

同一記録単位群は、＜生活に治療を取り入れる支援の必要性＞＜生活への支援＞＜生活の質・QOL が向上するような支援＞＜指導や説明の必要性＞＜自己管理やセルフケアへの支援＞が含まれていた。

【限られた受診時間内での素早い対象把握と迅速な看護援助の必要性】

このカテゴリは、外来の特徴である時間制約のある

中で、外来看護師が持つべき能力等についての内容として分類された。このカテゴリに分類された記録単位は 28 で、全記録単位数の 10.9%であった。

同一記録単位群は、＜短時間での症状把握の必要性＞＜短時間でのニーズ把握が大切＞＜短（限られた）時間での情報収集の必要性＞＜短（限られた）時間でのアセスメントの必要性＞＜素早い判断の必要性＞＜迅速な対応の必要性＞＜一人に関わる時間は短い＞が含まれていた。

【外来で実施される治療や検査に伴う患者の苦痛や安全安楽に配慮した援助の必要性】

このカテゴリは、外来患者が安全安楽にそして、苦痛が最小限な状況で外来治療や検査が受けられることについての内容として分類された。このカテゴリに分類された記録単位は 14 で、全記録単位数の 5.5%であった。

同一記録単位群は、＜安全安楽の必要性＞＜苦痛に対する援助＞が含まれていた。

【受診までの経緯と治療を継続しながら生活を送る対象者】

このカテゴリは、対象者は通院しながら生活をしていることや外来を受診するまでの経緯と治療を継続しながら生活している対象者としての認識の内容として分類された。このカテゴリに分類された記録単位は 11 で、全記録単位数の 4.3%であった。

同一記録単位群は、＜治療を継続すること＞＜生活しながら治療や通院＞＜受診の経緯＞が含まれていた。

【家族関係の把握と家族を含めた看護援助の必要性】

このカテゴリは、外来看護の対象者は外来患者とその家族であることについての内容として分類された。このカテゴリに分類された記録単位は 11 で、全記録単位数の 4.3%であった。

同一記録単位数は、＜家族や家族関係を把握する必要性＞＜協力者の有無を確認することの必要性＞＜家族に対する援助の必要性＞が含まれていた。

【対象者の意思を尊重する姿勢や精神的支援の必要性】

このカテゴリは、対象者の意思尊重に基づいた看護

支援の必要性和精神的支援の必要性の内容として分類された。このカテゴリに分類された記録単位は11で、全記録単位数の4.3%であった。

同一記録単位群は、＜患者（家族）の意思尊重＞＜患者の不安に対する援助の必要性＞＜精神面で患者を支える＞＜患者を受け止める姿勢の重要性＞＜対象者の気持ちに寄り添う必要性＞＜患者を一番に考える必要性＞＜患者の行動を肯定する声かけの必要性＞が含まれていた。

【外来看護支援を行うための幅広い知識の必要性】

このカテゴリは、外来看護師が持つべき資質としての content として分類された。このカテゴリに分類された記録単位は10で、全記録単位数の3.9%であった。

同一記録単位群は、＜知識獲得が大切＞＜幅広い知識が必要＞＜その場での知識が必要＞が含まれていた。

V. 考察

外来は、医療技術の進歩に伴い、高度な治療および侵襲性の高い検査や日帰り手術が行えるようになり、帰宅後、患者や家族は自己管理を行う必要性が不可欠となっている。また、国の医療費適正化推進のもと在院日数短縮が強化され、その結果、医療依存度の高い患者や高齢化に伴う患者の多様化により、個別性に応じた専門性の高い看護が必要となっている。したがって、看護実践の場が外来に拡大していくと同時に、地域との連携が最も重要となると考えられる。

このような状況の中で看護大学生の外来機能実習における学びの内容を実習レポートから分析した結果、10個のカテゴリが抽出された。その10個のカテゴリを、実習目標から考察し、達成度と課題を明確にする。

1. 外来機能実習における学びの内容と実習目標について

実習目標1) 成人期の発達段階を踏まえて身体的・心理的・社会的特徴にそって、総合的にアセスメントできる

この目標は、【対象者の生活と生活背景を含む総合的な情報収集とアセスメントの必要性】

【受診までの経緯と治療を継続しながら生活を送る対象者】【家族関係の把握と家族を含めた看護援助の必要性】【対象者の意思を尊重する姿勢や精神的支援の必要性】のカテゴリに相当する。中田 (2005)⁹⁾ は、外来

看護学実習での学びの中で、学生は患者が生活の中で困難を感じながらもそれを乗り越えながら強く生きており、患者が家族に支えられて生活していることも理解できていると報告している。本研究においても学生は、成人期にある外来患者には生活があり、その生活の中で治療を継続していることを学んでいる。また、対象者は患者だけではなく家族を含めるということを確認している。白鳥ら (2014)⁶⁾ は、成人看護学慢性期実習で実施している外来実習での外来における退院支援に関する学びの中で、学生は、患者や障害と向き合って生き生きと暮らす患者を知り、患者の望む生活が実現するように患者とともに考えると報告している。本研究では、外来看護の対象者には家族を含めている点や対象者の意思を尊重するという情意領域への学びもできていた。

実習目標2) 専門外来などで行われている看護を通して、対象者のセルフマネジメントの能力を高めるための看護支援について説明できる。

この目標は、【医療チームにおける外来看護や外来看護師の能力と役割】【対象者の生活の質を向上させ、セルフマネジメント能力を高める支援の必要性】【限られた受診時間内での素早い対象把握と迅速な看護援助の必要性】【外来看護支援を行うための幅広い知識の必要性】のカテゴリに相当する。白鳥ら (2014)⁶⁾ の報告では、患者の実生活に即した具体的な支援の重要性や医療者との良好な人間関係の構築が患者のセルフマネジメントに影響を及ぼすこと、短時間で患者を理解し適切な支援を行う外来看護の特徴とその難しさについて学ぶ機会となったとある。本研究でも患者の生活の質を向上させるための支援やセルフマネジメント能力を高めていくためには、限られた時間の中で対象者の情報を収集し、アセスメントが必要である。それは、外来看護師に求められる資質や能力として捉えていた。

実習目標3) 地域連携および入退院に関するシステムや機能を知り、対象者に必要な継続看護について説明することができる。

この目標は、【地域や多職種による医療チームとの情報共有および連携と継続看護の必要性】【受診までの経緯と治療を継続しながら生活を送る対象者】のカテゴリに相当する。

このカテゴリに分類された記録単位は全体の記録単位の 25.4% を占め他のカテゴリの中で最も多くの記録単位を含んでいた。中田 (2005)⁵⁾ は、外来看護実習は、多様な視点から継続看護について学びを深めていると報告している。本研究も医療チームや現在の治療に至るまでには多くの医療者との連携があったことを学んでいた。

実習目標 4) 外来で行われる治療・検査に必要な看護援助が理解できる。

この目標は、【外来で実施される治療や検査に伴う患者の苦痛や安全安楽に配慮した援助の必要性】のカテゴリに相当する。

このカテゴリに分類された同一記録単位群は<安全安楽の必要性>と<苦痛に対する援助>の 2 群であった。これに関しては、具体的な実習場面を通しての記述ではないため、今後は点滴センターや内視鏡室等の実習部門別の学びの分析をする必要があると考える。

実習目標 5) 外来機能実習を通して、チーム医療の意義や看護職の役割について理解し、説明できる。

この目標は、【地域や多職種による医療チームとの情報共有および連携と継続看護の必要性】【医療チームにおける外来看護や外来看護師の能力と役割】【外来看護支援を行うための幅広い知識の必要性】のカテゴリに相当する。

これらのカテゴリは、実習目標 2) と実習目標 3) にも含まれている。中田 (2005)⁵⁾ の外来看護実習での学生の学びによると、学生は、外来診療科相互の継続看護、他の医療職種との連携と看護師が短時間の中で患者の指導をするためには専門知識と技術、アセスメント能力が必要なことが理解できていると報告している。本研究においては、同じように他職種との連携が必要であることを学んだことに加え、施設外の地域との連携にまで拡大して考えることができていた。これは、実習病院の外来において、地域における拠点病院としての地域医療の機能を学生は臨床現場での体験を通して学んだものと考えられる。

2. 外来機能実習における課題

前述したように、外来の特殊性から実習形態は見学が主体になる。そのため実習目的や目標は、知識、思考・判断レベルにとどまるが、実際に内視鏡室では内視鏡中の患者の体位の保持を指導看護師とともに

い、安全・安楽な技術を実施している。診療科外来実習では、初診患者のアナムネーゼを指導看護師とともに聴取し、検査に同行して患者が診察を終えるまでの一連の過程を見学し、必要な情報を収集する。学内に戻ってからはその患者のサマリー作成をするなど、実践に近いレベルまでの経験もできている。今後は、内視鏡室、点滴センター、看護外来（皮膚・排泄ケア、緩和、糖尿病）、入退院センターや継続ケア室などの各部署での学びの内容を研究し、各部署での実習目標の検討も必要であると考えられる。

VI. 結 語

外来機能実習レポートの分析より、【地域や多職種による医療チームとの情報共有および連携と継続看護の必要性】、【対象者の生活と生活背景を含む総合的な情報収集とアセスメントの必要性】などの 10 個のカテゴリが抽出された。学生の学びの内容は、本学の外来機能実習の目的・目標を十分に達成していた。今後も更なる検討を加えて外来機能実習を継続していく必要がある。

謝 辞

本研究を行うにあたり、研究参加に同意した看護大学生に感謝を申し上げます。なお、本研究の一部は第 42 回一般社団法人日本看護研究学会学術集会で発表した。

引用文献

- 1) 中田芳子、新村直子 (2013) : 在宅看護論における退院支援・退院調整部門での学生の学び、東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集、22、19-26.
- 2) 堀越政孝、辻村弘美、恩幣宏美他 (2009) : 手術室実習における学びの内容、群馬保健学紀要、30、67-75.
- 3) 飯岡由紀子、高田幸江 (2014) : 聖路加看護大学紀要、40、112-117.
- 4) 舟島なをみ (2009) : 看護研究に使用されてきた質的研究方法論。質的研究への挑戦、第 2 版、東京、医学書院、34-75.
- 5) 中田芳子 (2005) : 外来看護実習での学生の学び、

東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集、15、22-32.

6) 白鳥孝子、浅井美千代 (2014) : 慢性期患者への

セルフマネジメント支援に関する学生の学び / 外来実習の記録分析から、千葉県立保健医療大学、5 (1)、65-70.

【Abstract】

This study aimed to clarify the contents of learning from the practical training of the outpatient function based on the submitted reports.

The learning contents were analyzed based on the method proposed by Berelson, B. In total, 51 nursing students consented to participate in the study. Analysis of 256 recording units from the descriptions of 51 students revealed the following 10 categories: [Need for information sharing and cooperation with the medical team of the community and various specialties, and for continuing nursing care] 25.4%, [Need for the collection and assessment of comprehensive information including the life and patient backgrounds] 16.8%, [Outpatient nursing care and the competencies and roles of outpatient nurses in the medical team] 12.9%, [Need for support to improve the quality of life and to enhance the self-management ability of patients] 11.7%, [Need for quickly understanding the patients and providing prompt nursing care support within the limited consultation hours] 10.9%, [Need for support to deal with pain associated with testing and treatment procedures in a safe and comfort manner in an outpatient clinic] 5.5%, [Patient backgrounds and patients who lead their life along with continuous treatment], [Need for grasping family relationships and including the family for the nursing care support], [Need for respecting the patient's will and for emotional support] 4.3%, and [Need for knowledge to provide outpatient nursing care support] 3.9%.

These findings revealed that the students' learning leads to the attainment of the goal of the practical training of the outpatient function.

Key words outpatient function training, practical training aims and goals, nursing students, practical training reports, learning contents